

たまもの

作：岡崎道成

演出：小川政弘

登場人物

大森敬一……大串明弘

佐々木美香……荒木恵

美香の母……磯部美恵子

福田正希……中野拓哉

< 前編 >

(SE 玄関のチャイム、ドアの開く音)

敬一 あ、こんにちは。僕…。

美香の母 あら、大森さんね。お待ちしてたんですよ。さ、どうぞ上がってください。美香一、
見えたわよー。さあ、どうぞ遠慮なさらず。

敬一 お邪魔します。

(SE 応接間のドアの音)

母 どうぞ、楽にしてくださいね。今お茶入れますから。

敬一 あ、お構いなく。

(SE 応接間のドアの音)

母 あ、美香。もう呼ばれたらすぐに降りてらっしゃい。こちら大森…あら、何ておっし
やいましたっけ。

敬一 大森敬一です。よろしく、美香さん。

美香 (無邪気に) よろしくお願いまーす。

母 何ですか美香。もっとちゃんとごあいさつできないの。おうちであなたの先生になる
方なのよ。ごめんなさいね、大森さん。おてんばでびっくりしたでしょ。

敬一 いえ、安心しました。実は女の子で中学浪人…あ、ごめんなさい。

美香 いいですよ、別にあたし恥ずかしいなんて思ってませんから。

敬一 ああ、浪人してるって聞いてたんで、気持ちが沈んでるかなって思ってたんです。で
も、余計な心配だったみたいですね。

母 ええ、その点はわたしも主人もあまり心配してないんですよ。小さいころから明るい子でしてね。ただ、去年は女の方に見ていただいてたんですけど、ちっとも勉強に身が入らなくて、それで今年は男の方に厳しくやっていただこうと思ひまして。よろしくお願ひしますね。

N 僕は太森敬一。青春大学教育学部の2年生だ。今お邪魔しているのは佐々木さんのお宅。うちの大学の学生課に出していた家庭教師の募集依頼をたまたま僕が見つけ、今日から勉強を始めることになったのだ。教える相手は、この家の一人娘で中学を卒業して現在浪人中の美香ちゃん。受験までの半年間、英語と国語を見てほしいということだった。

敬一 桜高校？ あの音楽科のある高校？

美香 ええ、普通科もありますけど、あたしはピアノ科志望なんです。

敬一 じゃあ前回は？

美香 あたし勉強は全然得意じゃないから、この間は学科試験で落ちちゃって、ピアノは割と自信あったから、もうすごく悔しくて、絶対もう一回受けてやるって決めたんです。

敬一 高校はそこしか受けてなかったの？

美香 1つ受かったところはありませんけど、あたしは絶対ピアノ科に行きたかったから。

敬一 へえー、でもよくご両親が浪人すること許してくれたね。

美香 最初は大反対でしたよ。高校行くのにわざわざ浪人する必要はないとか、音大を目指せばいいとか。でもあたし、そういうのって逃げるみたいで嫌だったんです。だから受かった高校の入学手続きの日も、手続きに行くふりして家を出て、そのまま公園で時間つぶしてました。それで両親もあきらめて、「あんたの好きなようにしなさい」って。家庭教師のことだって、母はあんなこと言ってたけど、あたしが母に頼んだんですよ。

敬一 よっぽどピアノが好きなんだなあ。幾つくらいの時からやってるの？

美香 4歳です。

敬一 4歳！ ってことは、もう10年以上！ そんなにやっていると、いい加減飽きちゃって“やめたい”って思うこともあるのかなあ。

美香 それがないんですよ、あたしの場合。小学校に入ってすぐだったかな、初めてピアノ教室の発表会に出た時、お客さんがたくさん拍手してくれて、それがうれしくて夢中になっちゃったみたいなんです。目立ちたがり屋なのかな、あたしって。

N 家庭教師第1日のその日は、こんな調子で終わってしまった。その後何回か勉強を見ているうちに、美香ちゃんが決して勉強のできない子ではないことが分かってきた。ただ、物事を計画的に進めるのが苦手のようなから、僕がスケジュールを組んでペースメーカーになってあげれば大丈夫だろう。僕は美香ちゃんから借りてきた問題集をめくりながら、スケジュール作りに取りかかった。

こうしてやっと、受験に向けての本格的な勉強が始まった。

敬一 じゃ、今日はここまでにしておこうか。美香ちゃん、このくらいのペースで進んで大丈夫かな。

美香 はい、頑張ります。でも大森先生すごいですね、こんなスケジュール表作っちゃうなんて。あたしって計画性まるでないから、いつも行き当たりばったりで失敗することが多いんですよ。

(SE ノック音)

母 先生、終わりました？ 今日からお夕飯うちで食べていってくださいね。先生「自炊してる」っておっしゃらないんだもの。

美香 先生“一人暮らし”って聞いたから、あたし、「月謝よりご飯食べさせてあげた方がいいんじゃない？」って母に言ったの。

母 美香！ 失礼なこと言うんじゃない！ 先生、ごめんなさいね。本当にこの子ったら....。

敬一 マイったな、美香ちゃんには。でも凶星だったりして。

N 食卓には、決してぜいたくではなかったが温かい家庭料理が並んでいた。

敬一

美香 先生？ 先生!?

敬一 え、何？

美香 いえ、どうしたんですか？

敬一 ああ、今、お祈りしてたんだ。

美香 お祈り？

敬一 うん、神様にね、食事の感謝のお祈り。そうか、やっぱり驚くよね。僕の悪友で福田正希ってのがいるんだけど、そいつにも、いつもからかわれてたな、「アーメンソーメ

ン」って。そいつも今では僕と同じ教会に行ってるんだけどね。

母 あら先生、じゃあキリスト教でいらっしゃるの？

敬一 ええ、そうなんです。

母 まあ、先生も。偶然ってあるものねえ。

敬一 僕もって、佐々木さんもそうなんですか。

母 いえいえ、わたしたちじゃなくて、前にこの子の勉強をみて下さった山口さんって女の方がやっぱりキリスト教でね、時々この子を教会に連れていってくれたりしたんですよ。

敬一 そうなんですか。じゃあ今度は僕が連れていく番ってことかな。ああ、ちょうどいいや。来週“秋の特別集会”っていうのがあるから、美香ちゃん、それに来てごらんよ。

N 集会の日、いつもの勉強を時間を早めにくらして、僕は美香ちゃんを教会に連れていった。集会はイエス・キリストを信じた人の信仰の体験談、賛美歌の独唱などの後、牧師先生が伝道説教をして1時間半ほどで終わった。

敬一 どう、美香ちゃん。お話は難しくなかった？

美香 うーん、まだよく分かりません。罪とか赦ゆるしとか、あんまりピンとこないんだもの。でもね、あの賛美歌の独唱は本当に感動しました。素人じゃないなってすぐに分かりましたよ。

敬一 さすがは芸術家の卵。あの人は声楽の先生もしていて、自分のリサイタルも開いているベテランだよ。

美香 やっぱり。でもそういう人の歌でも、ここの教会の人たち聴き慣れちゃってるのかしら。

敬一 どういうこと？

美香 だって、だれも拍手しなかったじゃないですか。失礼ですよ。あんなに上手で、それにとっても心がこもっていたのに。“ああ、この人は自分の信じるものを歌ってるんだな”って、あたしにも伝わってきたんです。それなのに…。

敬一 美香ちゃん、あの人は何のために今日歌ったんだと思う？

美香 何のためにとって…うーん、だから、自分の信じるものを、聴いている人に伝えるため、かなあ。

敬一 うん、僕もそう思う。じゃ、拍手はどういうときにするんだろ。

美香 それは、その人にすばらしかったっていう気持ちを表すときだと思います。

敬一 うん。今日みたいな伝道集会では、賛美もお話も全部神様のためにするんだ。「神様に栄光を返す」という言い方をするんだけどね。今日歌ってた人も、自分の歌の良し悪しを聴かせようとしたんじゃない。そのすばらしい歌を神様にささげたんだ。だから僕たちもその人に対しては拍手しないんだ。美香ちゃんみたいに、伝えたいものをちゃんと分かってくれた人がいたことで十分じゃないかな。

美香 ふーん、そういうもんですか。変わってるんですね、クリスチャンって。

N 神様のために歌うということを美香ちゃんは分かってくれたらうか、と僕は思った。そこへ、今日の集会の受付をしていた友人の福田正希が近づいてきた。

敬一 正希、受付ご苦労さん。

正希 いやー、マイったマイった。イスが足りなくなっちゃってさ。牧師館まで3往復もして運んだんだぜ。でも初めての人がこんなに来るなんて、うれしいよなあ。お、ここにも一人いるみたいだな。

美香 初めまして。あたし、大森先生に勉強を見ていただいている佐々木美香です。

正希 ああ、君が。聞ってるよ。敬一をなかなか手こずらせてるみたいだね。

敬一 おい正希。

美香 正希って、じゃあ、あなたが大森先生の悪友の福田さんですか？

正希 えっ？ 敬一、お前ー！

敬一 ははは、これで美香ちゃんとお相子だろ。

N こんな具合で、美香ちゃんは正希ともすぐに打ち解けてしまった。

正希 美香ちゃんはピアノ科を目指してるんだっけ？

美香 はい。音楽が好きなんで、今日も牧師先生のお話より独唱のほうが感動しちゃいました。

正希 そっか、そりゃあよかった。ここの教会にはほかにも音楽のたまものを持った人が多いから、また来てみるといいよ。

美香 たまもの...って、なんですか？

敬一 たまものっていうのは、神様から与えられた能力とか、性格のことだよ。

美香 ...神様から。

敬一 って言っても、今までできなかったことが突然できるようになるとかいうんじゃない

て、何か僕たちにできることがあるときに、その背後に神様がいることを認めて、神様のためにそれを使うっていうのかな。今日歌ってた人もそうだし、美香ちゃんのピアノもそうかも知れない。

美香 あたし嫌です そんなの！

敬一 え？

美香 あたし、そんなの嫌です！ クリスマンってやっぱりそうなんですか？ そうやって人を利用しようとして...前の人と同じじゃない！！

敬一 あっ、美香ちゃん、ちょ、ちょっと!!

正希 美香ちゃん、どうしたんだよ！

N 僕には何が起こったのか分からなかった。教会を飛び出した美香ちゃんを追いかけるのも忘れ、僕と正希はただぼう然と立ったままだった。

<後編>

美香 あたし、そんなの嫌です！ クリスマンってやっぱりそうなんですか？ そうやって人を利用しようとして...前の人と同じじゃない!!!

敬一 あっ、美香ちゃん！

N 僕の名は大森敬一。青春大学教育学部の2年生だ。今、音楽高校のピアノ科を目指して浪人中の佐々木美香の家庭教師をしている。ある日、僕の行っている教会の集会に美香ちゃんを連れていったのだが、集会が終わって僕と話をしていた彼女は、急に怒ったように教会を飛び出していった。僕には一瞬、何が起こったのか分からなかった。

次の日の午前中は授業がなかったので、前日のことが気になっていた僕は美香ちゃんの家に向かった。家に近づくと、彼女が弾いているのだろう、ピアノの音が外に聞こえてきた。

(SE 玄関のベル。ピアノ弾く音)

母 あら大森先生、まあ昨日は美香がお世話になりました。どうなさったの、こんな時間に？

敬一 あの、昨日教会で初めて来た人に配った聖書を美香ちゃんが忘れていったので、届け

に来ました。大学に行く通り道ですから。

母 まあ、わざわざすみません。美香一、あなた教会に聖書忘れてきたの？ 大森先生、わざわざ届けにいらしたのよ。ほんとにそそっかしくて。あ、どうぞ上がってください、先生。

敬一 いえ、それ届けに来ただけですから。

美香 あ、先生、昨日はどうも。

敬一 やあ。

美香 ちょうどよかった、先生、英語で分からないところがあるんですけど、時間ありますか？

敬一 あ、ああ。

美香 ああ、よかった。じゃちょっとお願いします。

N 昨日のことは思い違いかと思ったくらい、美香ちゃんはいつものように明るかった。お母さんにも何も話してないようだ。

敬一 “Make yourself at home.” ああ、これが。この“at home”は「家で」じゃなくて「くつろいで」という意味なんだ。

美香 じゃあこの訳は、「どうぞくつろいでください」ですか？

敬一 そうそう、分かってきたじゃないか。

美香 なーんだ、お客さんに向かって「家で自分自身を作りなさい」なんて、変だと思ったんですよ。あーあ、でもどうしてピアノ科なのに英語なんてやんなきゃいけないんだろう。

敬一 でも美香ちゃん、将来ピアニストになったら、外国の人とも話すようになるんじゃないかな。英語やってて損はないと思うよ。

美香 ...でもあたし、そうなってもピアノ弾けるのが神様からのたまものだなんて思いませんから。

N 美香ちゃんの顔は、昨日教会で見たあの厳しい表情に変わっていた。僕は思い切って尋ねた。

敬一 美香ちゃん、昨日どうして急に怒ったりしたの？ 確か「あたしを利用する」とか、「前の人と同じ」と言っていたよね。よかったら話してくれないかな。

N 美香ちゃんはしばらくうつむいていたが、やがて口を開いた。

美香 ...前にあたしの家庭教師をしてくれた山口さんっていう人がクリスチャンだったって言いましたよね。山口さん、あたしを時々教会に連れていってくれたんですけど、教会の人たち、みんな親切でした。あたしが受験生だって知って一緒にお祈りしてくれたりして。お祈りなんてよく分からなかったけど、何だかほっとした気持ちになって、“ああ、いい人たちだなあ”って思ったんです。あるおばあさんは、あたしのピアノを聴いて言ってくれたんです。

おばあさん（回想）これは神様があなたに特別に与えてくださった賜物ね。

美香 あたし、そう言われてうれしかったんですよ、その時は。でもある時、山口さんが言ったんです。

山口（回想）あなたがクリスチャンになってオルガンを弾いてくれるようになったら助かるんだけど。

美香 その教会、礼拝でオルガンを弾く人がいなかったんです。それ聞いてあたし、頭にきちゃって...みんな、だからあたしに親切にしてたのかなって。山口さん、結局自分たちのためにあたしを教会に連れて行ったんだって。でもあたし、そんなに物事をクヨクヨ考えるほうじゃないし、山口さんもそんなつもりで言ったんじゃないんだって思うことにして、それっきり忘れてました、昨日までは。でも大森先生が、あたしのピアノは神様からのたまものって言ったのを聞いて、急に思い出しちゃったんです。やっぱりそうだったのかなって。昨日教会で歌ってた人は、神様のために歌っていたのかもしれない。でもあたしはそんなこと考えたことない。あたしは神様のためにピアノやってきたんじゃないもの。どうしてそうやってあたしに押し付けようとするんですか？ あたしは別に神様信じてるわけじゃありません。あたしはだれのためでもない、自分のためにピアノをやるんです。

N 長い間、美香ちゃんの心の奥に押し込まれていた思いが、一気に飛び出したような気がした。浪人してピアノ科を目指すほどの、美香ちゃんのピアノに対するプライドを、僕も山口さんも自分で気付かないまま傷つけていたのかもしれない。

その日、僕は何も言えないまま佐々木さんの家を後にした。

その後、美香ちゃんの口からその話が出ることもなく、僕も教会に誘うこともしなかったもので、その日のことはそれっきりになった。勉強はスケジュールにそって順調

に進み、やがて年が明けた。正月早々のある日

- 母 先生、今年も美香のことよろしくお願ひします。こんなおてんばで大変でしょうけど、受験までもう少し辛抱してくださいね。
- 敬一 いえ、こちらこそ。
- 母 先生のお蔭で模擬テストの成績もずいぶん良くなってますし、本当に大森先生にお願ひしてよかったわ。
- 敬一 いやあ、それは美香ちゃんが頑張ってるからですよ。本当によく勉強してますから。
- 美香 それも先生の立ててくれるスケジュールのお蔭です。あのね、お母さん、先生の立てるスケジュールってとっても勉強しやすいのよ。あたしでも無理なくこなせるペースで、余裕も取ってあって、それでいてちゃんとひと月分終わるようになってるのよ。
- 母 そうみたいねえ。だってね先生、この子 言うんですよ。「あたしがこんなにちゃんと勉強できるなんて、今まで知らなかった」って。美香、あなたもよく頑張ってるけど、それを引き出してくださっているのは先生だってこと忘れちゃダメよ。
- 美香 はーい、分かってまーす。
- 敬一 よかった。毎月あれを作るのに一番気を遣ってるから、そう言われるとほっとするよ。
- 美香 ふーん、気を遣うんですか。ねえ、どんなふうに？
- 母 美香ったら。あなたの飽きっぽいところとか、苦手なところとかを考えて、あなたが一番勉強しやすいように計画を立ててくださるんじゃないの。ねえ先生。
- 敬一 ええ、まあ。
- 美香 はいはい、どうせあたしは飽きっぽいです。でも、そっか、それは先生があたしのことよく分かってるってことね。すごい、先生、よい羊飼いまたいですね。
- 敬一 よい羊飼�い？
- N 突然の聖書の言葉に、僕は思わず聞き返した。
- 美香 ええ、前に先生に連れていってもらった教会で新約聖書くれたでしょ。それ読んでたら、そんなところがありましたよ。ええっと、ええっと...
- 敬一 「わたしはよい羊飼�いです。わたしはわたしのものを知っています。」ヨハネの福音書だね。
- 美香 あっそれぞれ。あたし動物が好きだから覚えてたんです。イエス様が羊飼�いだなんて面白いですね。

敬一 ああ。羊飼いはね、どんなにたくさんの羊でもみんな見分けることができるんだ。一匹一匹のことをよく知ってるんだね。そして、その一匹一匹を、羊飼いは本当に大事にする。聖書は、それがイエス・キリストと僕たちの関係だって教えてるんだ。僕たちは一人一人違う人間だよ。明るい人、きちょうめんな人、勉強の好きな人、嫌いな人、ピアノのできる人、できない人。それぞれが、羊飼いのイエス様にとっては大切な存在なんだ。...美香ちゃん、教会で独唱をした人の話をしているかな。

N 僕は美香ちゃんの顔がこわばらないのを確かめて、話を続けた。

敬一 その人もね、美香ちゃんみたいに若いころから歌の勉強をして、音大を卒業してから結構活躍してたそう。ところが30歳の時、神様を信じるようになって、歌をぱったりやめちゃったんだって。

美香 どうしてですか？

敬一 うん、今までは歌うことが自分の人生のすべてだと思っていた。だけど神様を信じて、自分が生きる本当の目的を知った。もう自分のために歌うのはやめよう。もし自分の歌を神様が用いてくださるのなら、神様がもう一度道を開いてくださるはずだ、そう思ったそう。

美香 なんか...すごいですね。

敬一 うん、そういうのって、神様が自分のことをすべて知っておられるっていう信仰があって、初めてできることだと思うんだ。

美香 それでどうなったんですか？

敬一 歌をやめて半年くらいして、大学で声楽を教えてくれないかっていう話が来たそう。それもキリスト教系の大学から。今はその大学で声楽を教えながら、クリスチャンとしてすばらしい働きをしてるよ。

美香 ふーん...。そういう話を聞くと、歌うのが神様からのたまものだってその人が思う気持ちも分かるような気がします。

N そうしてしばらくコーヒーカップをくゆらしていた美香ちゃんが、静かに立ち上がってピアノの前に向かった。

美香 先生、あたしのピアノちゃんと聴いたことないでしょ。試験で弾く曲、聴かせてあげますね。

(SE ピアノ曲)

N 僕は美香ちゃんのピアノを聴きながら、さっきの聖書の言葉の続きを思い出していた。

「わたしはよい羊飼いです。わたしはわたしのものを知っています。また、わたしのものはわたしを知っています。」

神様は、僕が立てるのなんかよりもずっとすばらしい計画を、美香ちゃんのために持っていてくださる。そんな、美香ちゃんのことをすべて知っておられる神様に気付いてほしい。そう祈りながら、僕はピアノを弾いている美香ちゃんの後ろ姿を見つめていた。

< 完 >